

真の財産

良きいんねんの財産は子孫を守り、悪きいんねんの財産は子孫を苦しめます。

賭けごとや働きもせずに儲けた金が、人を助け、社会に貢献することは、まずないようです。まじめに働いて得た金は、その中から神への恩報じとなり、人だすけとなり、明るく豊かな家庭の支えとなり、真実の理がその金につきまとして、誠の働きをします。

しかし、金を所持する人の自覚によっては、悪き金を更生させることができます。それは、不当に儲けた金は百円の金も五十円の価値しかないと悟り、他のため 人のために、有益に使うことです。反対に、公共の期間への寄付とか献金は十円の金も惜しみ、金に関する限り、親子も兄弟も親戚もなり。まして他人がいかにか 懇願しても、冷たく拒絶するというようであれば、結果として、可愛い我が子を通じ、金を社会へ流し出させることとなります。

金は、単にためるためにあるのか、それとも使うためにあるのか。使ってこそ初めて金としての価値が出て来るので、使わずに死蔵するだけの人は、使うだけの徳を持ち合わせない人です。

ある千万長者が、秘書に向かって「きみ、ぼくの財産は今、いったい、どれくらいになったのかね。」と尋ねました。秘書は、「そようでございますね、旦那様 の財産は、たしか三万円と思います。」と答えました。「この馬鹿者、貴様のようなやつに財産の管理をさせておいたら、どんなことになるや知れん」その財産 家が激高すると、秘書は平然として、「そうですね、旦那様が学校へ寄付した一万円と、養護施設へ寄付した一万円と、お寺に寄付した一万円の合計三万円、これだけが旦那様の財産です」と言いました。

その財産家はそこで初めて、自分が金の虜になっていたという迷夢から覚め、なるほどいくらあってもなんにもならない。有意義に使っただけが真の財産だ、と悟り、以後、社会のため惜しげなく私財を投じ、人々から尊敬されるようになった、という話があります。

出すべき金を出さず、また為すべきことも為さずに残した金は、動くべき金が不自然な姿で頓挫しているので、それはあたかも、満ち溢れた水を支えきれずに決壊するダムのように、ためたものが激しい勢いで流れ出してしまいう事になります。結論としては、正しきに費消された金のみが、我が家を守り、我が子孫を守る というわけです。

出典：『話の台』天理教道友社 Web ストアより購入可